

博士論文（要約）

インプロ実践がもたらす  
高齢者の〈老い〉のイメージの変容  
-高齢者インプロ集団「くるる即興劇団」を事例として-

園部 友里 恵

超高齢社会と呼ばれる現代日本においては、「健康」への関心が高まり、「健康づくり」「介護予防」「認知症予防」などに必死に取り組む高齢者の姿をしばしば見る。それは、〈老い〉に対してネガティブなイメージが付与されているということであり、〈老い〉に抗うための手段として「学習」が捉えられているということでもある。そうした過剰な「健康」志向の社会においては、既に「健康でない」高齢者や、自らの「健康」状態に不安を抱える高齢者をネガティブな存在と見なし、「健康な」高齢者がそうでない高齢者を支えるという「支援・被支援関係の固定化」が生まれる。そうした関係が生まれることによって、「健康でない」高齢者は、自らを「迷惑をかけてしまう存在」と意味づけ、他者と関わることをやめてしまう可能性も孕んでいる。

本研究は、〈老い〉に付与されるネガティブなイメージをポジティブなものへと変容させていくことに、多様な〈老いた身体〉を生きる高齢者たちがともに学びあい、ともに活動していくことができる突破口があると考え。その手がかりとして、本研究では関係論的アプローチに着目する。個体論が「主体があって客体を認識する」のに対し、関係論では、まず「関係」がありその関係のなかで「私」や「あなた」が事後的に構成されるという考え方をする。〈老い〉は、個体論的に捉えれば、個人の身体に帰属するネガティブなイメージのものになりがちである。しかし、関係論的に捉えたとき、それは他者との関係のなかでたち現れるものとなり、そこにポジティブなイメージが付与される可能性を秘めるものとなる。

関係論的に〈老い〉を捉えていくことを可能にする活動として、本研究ではインプロを取り上げる。インプロとは、脚本も事前の打ち合わせもないなかで、その場で起こったことに目を向けながら、他者とともに物語を生み出していく即興演劇を指す。インプロという活動自体、関係論的なものとして存在している。そのため、高齢者がインプロ実践のなかで〈老い〉をパフォーマンスすることは、そこに浮上した〈老い〉を関係論的に捉えることとなり、そこにポジティブなイメージを付与していくという可能性を有している。

そこで、本研究では、高齢者インプロ集団「くるる即興劇団」を対象として、インプロを学ぶことが高齢者の〈老い〉のイメージを変容させるのかを明らかにすることを目的とし、同劇団におけるアクション・リサーチを実施した。

第1章では、高齢者の教育・学習、および高齢者の演劇活動をめぐる先行研究や実践動向を整理した。そして、これらが主に個体論的な捉えをされてきたがゆえに、「健康でない」高齢者がその活動主体として十分に捉えられてこなかったことを指摘した。

第2章では、インプロの実践方法論や日本におけるインプロ実践の広がり、そしてインプロと学習に関する先行研究を整理するとともに、本研究の対象である高齢者インプロ集団「くるる即興劇団」の概要および実践の内容について述べた。

第3章では、くるる即興劇団に参加する高齢者たちがインプロをいかなるものと捉え、

なぜインプロを学び続けているのかを明らかにした。その結果、高齢劇団員は、インプロの特徴を、①負担の少ない活動、②協働的な人間関係、③能動的な参加、④自由な表現、⑤参加者の多様性、という点に見出していることが明らかになった。ここから、インプロは、個人の身体的・認知的能力の高低が問われないことから、自身の身体的・認知的能力に不安を抱える高齢者も含めた多様な高齢者にも参加しやすい活動となっていること、高齢者には他者との協働による表現の欲求があること、親密過ぎずフラットな関係性のなかで学びあえる場を求めていることが示唆された。また、高齢劇団員がインプロを学び続ける理由は、①インプロ自体が楽しいから、②自分の変化を実感しているから、③呆け防止になるから、④多様な考えや能力が受容されるから、⑤人間関係が良好だから、の5点に整理された。そして、以上のインプロの継続理由には、「できないことをできるようにする学習観」、「できなくなることをこれ以上できなくならないようにする学習観」、「できないことにも価値を付与される学習観」という3つの学習観が含まれており、インプロ実践の場が、〈古い〉に対してポジティブなイメージをもつ高齢者もネガティブなイメージをもつ高齢者も、ともに学び続けることができる場となっていることを指摘した。

第4章では、第3章で見出した「できないことにも価値を付与される学習観」に着目し、インプロの実践方法論における「失敗」の扱われ方について検討し、くるる即興劇団において、「失敗」すなわち個体論的な〈古い〉に伴う「できなくなったこと」がいかにかパフォーマンスのなかにとりこまれていくのかを描き出した。さらに、「できなくなること」を意図的につくり出す道具として「仮面」を取り上げ、仮面の着用（＝言葉を使えなくなること）が高齢者にいかなる影響を及ぼすのかを明らかにし、そこから高齢者の〈古い〉との向き合い方を解釈した。仮面の着用が高齢者に及ぼした影響は、①舞台恐怖の軽減、②変容、③言葉からの解放と身体への着目、④言葉の制約と過剰な動作の誘発、の4つに整理された。そして、そうした語りのなかには、〈古い〉を「解放」と見なすか「制約」と見なすかという相反する価値観が含まれており、またそれらが個人のなかにも共存する場合もあると考察した。

第5章では、劇団員間の関係性に焦点化し、脳梗塞後遺症を有する劇団員eさんに対する他の劇団員の意識・行動変容のプロセスを明らかにした。まず、eさんがくるる即興劇団の活動に参加し始めたときに他の劇団員はeさんの存在をいかなるものと捉えたのかを明らかにし、そこに内在する〈古い〉のイメージを考察した。その結果、他の劇団員たちは、eさんの存在を、①出てくるだけでもすごい、②「良く」変化している、③eさんだからこそできる表現がある、④eさん本人の思いが気になる、の4つの視点から捉えていることが明らかになった。そして、そこには、「できなくなっていくことをできるようになろうと努力することに見出されるポジティブさ」と、「できなくなっていくこと自体に見出されるポジティブさ」の2つのポジティブさが含み込まれていることを見出した。加えて、eさんのインプロへの参加を可能にしているのは、くるる即興劇団という学習の場には、後者のポジティブさが含み込まれているからではないかと指摘した。次に、eさんの存在にポジティブ

ヴさを見出せなかった劇団員の T さんが、その後 e さんとのインプロ実践を繰り返すなかで、e さんの存在の捉えや e さんとの関わり方がいかに変容していったのかを描き出した。その結果、T さんは、e さんの「できないこと」が自らのとり結ぶ関係次第でパフォーマンスに組み込み得るものとなることに気づき、e さんのもつ「障害」自体も e さんなのであるというように、e さんの存在そのものを受容していく過程がみられた。

第 6 章は、劇団員とファシリテーター（筆者）の関係性を問うものであり、くるる即興劇団という高齢者インプロ実践に関わっていたファシリテーターの視点を積極的に描くことによって、この実践の意味を省察し再構成したものである。特に、「呆け」および「呆け防止」をめぐる、「高齢者ではない私」であるファシリテーターが、「老いの当事者」である高齢劇団員とインプロ実践を介して関わっていくなかで、ファシリテーター自身も「呆け防止」や〈古い〉のイメージを関係論的に捉えられるようになっていく過程を描いていた。

終章では、以上を踏まえ、インプロを学ぶことは高齢者の〈古い〉のイメージを変容させるのか、という問いに対して、次のように結論づけた。インプロを学ぶことは、高齢者の有する〈古い〉に対するネガティブなイメージを完全に消し去ることはできない。しかし一部、そのイメージをポジティブなものへと変容させることができる。

一部、ポジティブなものへと変容させるということを実現するのは、インプロを学ぶなかで、高齢者たちが、老いるからこそできる表現を発見することができるためである。そこには、個体論的な考え方から関係論的な考え方への転換がある。

インプロは、俳優たちが関わりあいながら即興的に物語を紡いでいく演劇である。そこでは、「正しいこと」が明確に存在せず、誰かの「できない」ということ自体も、1つの「表現」、「物語の素材」として受容され、パフォーマンスが生成されていく。そうした関係のなかに置かれることは、劇団員たちが関係論的な存在としてその場にいることでもある。そして、その場にいることによって、他者との間に〈古い〉の多様なイメージが立ち上がり、同時にそれはパフォーマンスとなって表出されていく。

こうした実践のなかには、高齢者が〈古い〉にポジティブなイメージを付与する余地が残されており、ここに、「健康でない」者を含む、多様な〈老いた身体〉を有する高齢者がともに活動できる可能性が秘められていると考えられる。

しかし、インプロを学び続けたからといって、そして、自分たちの〈古い〉のパフォーマンスのおもしろさを発見したからといって、〈古い〉を完全にポジティブなイメージとして捉えることはできない。なぜならば、関係論的な存在であるがゆえに、自分が「できない」ことによって「相手に迷惑をかけるのではないか」という思いと隣り合わせにあるためである。